HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語における「言いさし文」の統語論的構造及び語用論的機能［全文の要約］
Author(s)	大山, 隆子
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13401号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74493
Type	doctoral thesis
File Information	Takako_Ohyama_summary.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　大　山　隆　子

学位論文題目名

日本語における「言いさし文」の統語論的構造及び語用論的機能

本研究では、日本語の構造特性に見られる様々な現象の中に、白川(2009)の研究にある「言いさし文」の現象、また、Evans(2007)の「非従属化」現象などにおける「従属節＋接続助詞」で終わる文に注目し、それらの持つ統語論的構造と語用論的機能を考察することを目的とする。これまで、「言いさし文」は統語論的には、未完結で不完全なものとして、扱われてきた経緯がある。しかし、「言いさし文」は日本語の特に会話文で頻繁に見られる。日本語の話し言葉において「完全文」ではなく「言いさし文」が選好されるのはなぜか、談話の中でどのような効果を持ち、日本語の構造特性とどのような関係があるのかという疑問が研究の出発点であった。

本研究では、特に接続助詞で終わる日本語の「言いさし文」に注目し、主に会話データの分析・考察を行った。研究の意義としては、日本語における「言さし文」を研究対象としているが、「言いさし文」は通常、文法規則の上では、不完全な文であり、日常的な言葉使いとしての分野とされる傾向にあるが、決してそれだけではなく「節」が完結するとはどのような事なのかという意味を含んでいるものと考える。日本語の文の成り立ち全体を解明するのはなかなか難しい問題ではあるが、本研究がその問題提起の糸口となり得ることを願う。

日本語の「言いさし文」については、これまでも研究がなされてきた。先行研究では文末をフェードアウトするように言いさす「もう時間も遅いですし・・・」のようなタイプのものを取り上げ、その説明としては、「婉曲に柔らかく理由を述べる」としている。しかし、本研究で対象としたのは、特に最近若い世代で観察される「泣いてないし。」のような、文末を打ち止めるように切り、下降調に終えるものである。この使用は、話し手の何らかの強い伝達態度を示すマーカーとして機能しているものと考え、主に会話の中で使用される接続助詞の「し」「たり」「から」「ので」、引用形式の「って」、終助詞の「よ」「ね」で終わる「言いさし文」を分析対象とした。それらの統語論的構造を明らかにし、談話の中でどのように使用され、どのような効果を持つのかその語用論的

機能を分析考察した。

本論文は、全体として 10 章で構成され、第 1 章では、「研究の目的、意義、本論文の構成について」述べ、第 2 章では「本研究の枠組み：予備的議論」について、主に本研究の分析の軸となる枠組みについて述べた。主な枠組みとして、統語論的構造においては、最初に複文構造全体を見るため、「単文と複文の定義」「複文における従属節の構造と種類」「文の階層性」について述べ、「言いさし文」については、日本語の言いさし文における代表的な先行研究、白川(2009)の「言いさし文」、Evans(2007)の「非従属化現象」、大堀(2002)の「中断切構文」を概観し、それらの再検討と本研究における「言いさし文の位置付け」について述べた。さらに、語用論的枠組みとしては、「メタ語用論的知見の再検討」では、談話標識(discourse marker)を取り上げ、社会語用論的基盤として対人的機能の面から、ポライトネスを主な分析の軸とした。

次の第 3 章では「節の接続の考察」について述べ、接続の形態「非て形」「て形」「たり」「し」についてそれらの接続の異なりをみた。分析結果として、「て形」は話し言葉的であり、安定性があり、文法化が進んでいると分析した。「非て形」は書きことば的で、区別が明確であり、「て形」と比較すると文法化は進んでいないとした。「非て形」は単純列挙を基本とするが、「て形」は単につなぐ機能を持ち、様々な意味解釈を呼び込むとした。「たり」及び「し」との異なりについては、「し」はテンス分化を持つが、「非て形」「て形」「たり」はテンス分化を持たず、その節の独立性に異なりがあると考察した。

次の第 4 章では、「「し」の用法」について分析考察した。「し」の意味用法としては「し」は、「a および b (および c)」と要素を累加していく連言用法としての意味的特性も持つとした。また、「し」が持つ並列と理由の意味合いは、どのように生じるのか考察した。これまで先行研究において述べられてきた「し」における「並列」及び「理由」の意味用法は、本研究では基本的に「並列」の用法であるとした。「し」は基本的なその統語構造から「並列」と「理由」の用法の二つに明確に分かれるものではなく、二つが重なり合うこともあり得る。また、「し」の「理由」の意味は「し」そのものにあるのではなく、前件と後件の文の異なりによって生じるものである。発話内行為を持つ異なる文の種類をつなげる時、「し」の文は、理由・根拠を表す効果を示すことができるものとした。

次の第 5 章では、「「し」による「言いさし文」」の統語論的構造と語用論的機能について分析考察した。「し」が連言形式をとらず、言いさし文として、単独で使用される場合を「非連言形式」と呼び、「言いさし文」で使用される場合、先行研究においては、並列の意味が消失し、理由の意味だけが残るとされていたが、本研究では「～し。」の

後も、その連言性は、潜在化し残存しており、消失してはいないと考察した。従って、「並列」の意味も消失していないものとした。さらに、話し手はその連言性を効果的に利用し聞き手の推論にその解釈を委ねているとも言えそうである。この章ではまた「言いさし文」の省略型と付加型について述べた。日本語における非従属化と言える「言いさし文」は「３時までに行かなければ。(ならない)」のような場合では、主節「ならない」の復元が形式的に可能であるため、「省略型」とし、「泣いてないし。」のように主節の復元がいく通りも考えられ、解釈上の復元になる場合は、「付加型」の言いさし文となるとした。

次に「し」の付加型言いさし文の社会語用論的機能について、ポライトネスの関係においては、フェイスリスクが小さい、親しい関係の場合に使用でき、フェイスリスクが大きい関係では、使用は難しいと分析した。話し手は「従属節し。」で打ち止め「発話内容については変更しない」という伝達態度を示している。このような発話に対する強い態度を示す根拠としては、もともと「し」は「並列・累加」を表す「連言関係」を持つ統語的特徴から、「従属節し。」で終わっていても、話し手の根拠とするものはまだ幾らでも推論可能である。話し手の「明示していないが、実は根拠はまだまだある。」という態度である。元の「連言用法」の統語的特徴から、語用論的に機能が拡張したものと考えられる。なお、「し」が「非連言形式」になった場合、相手との対立関係の有無や文脈により、その談話機能は異なるものと考察した。最後に、話者交替の場では、未完結にすることにより、聞き手は、発話が切れているのか切れていないのか適切移行場が確定しにくく、会話の場における主導権、優位性を確保しようとする話し手の戦略が見られるものと分析した。

次の第６章では、「「たり」の基本特性：選言性と言いさし文への拡張」について分析考察した。「たり」も「し」と同じく、並立を表す接続助詞であるが、並列せず「ワイン飲んだりしますか。」や「これ全部捨てたりして。」のように単独での使用や、言いさし文での拡張的使用が見られる。

分析結果として、「たり」は「a あるいは b（あるいは c)」と、ある集合の中の要素を選び取る「選言用法」の意味的特性も持つとした。「たり」が単独で使用される拡張的用法「非選言用法」の場合も、「たり」の意味的特性は残存しており、他にも選択肢があるかのように、標示上選言を後退させているものと考察した。この非選言用法の拡張要因としては、「〜たり〜たり」が、連体修飾、連用修飾ができ、そこで打ち止めることもでき、その用法の広さから、機能が拡張していったものと考察した。「たり」の社会語用論的機能として、ブラウン&レヴィンソンの「ポライトネス（politeness)」の観点から分析を行った。「たり」の非選言での使用は、ネガティブ・ポライトネス、およ

び、ポジテイブ・ポライトネスのストラテジー「ヘッジ（hedge）表現」として間接化の機能を有しているとみられた。「〜たりしますか」と非選言にすることにより、標示上選言を後退させ、他にも選択肢があるかのように、これも一つの選択肢だと、聞き手に緊張感を与えないようにする間接化の効果を持つものと分析した。特に若年層は相手との距離を考えながら話す傾向もあり、話題を限定しない「たり」の非選言使用は、社会的な距離をとるための間接化の有効な方法であると思われる。「たり」の非選言形式での使用は、語用論的適切性（情報伝達効率性）より、対人的適切性（ネガテイブポライトネスの効果・間接化）が重要視され、その結果、その構造的特性を崩した「非選言」での使用が選択されることにより、新たな談話効果を生み出しているものと考察した。

次に、「〜たりして。」の場合は、仮想的に示し、冗談のマーカーとして機能しているものとした。「もしかするとそんなことも考えられる」とその行為をあくまでも、可能性が低い行為として述べることにより、行為に対する責任を回避しようとする話し手の姿勢もうかがえる。不確実なことについては婉曲化する必要もあり、ポライトネスの観点からは、話し手が責任を負わずに済むように予防線を張る言い方でもあり、「たり」は、緩和的に「ヘッジ(hedges)表現」として使用されていると考察する。「たり」は非選言で使用され、主節を後退させることにより、そこに推意が生じ、聞き手の推論が必要となる。話し手は聞き手に返答を求めているわけではない。しかし、聞き手に推論させ、その判断を負わせ、聞き手の本音を引き出す、話し手の戦略的な発話ともとれると考察した。

次の第 7 章では「因果関係から言いさし文への語用論的分化」について分析考察を行った。ここでは「し」と同じ接続助詞の「から」と「ので」についてその統語論的構造と語用論的機能を分析し、最後に「し」との異なりを見た。

分析結果として統語的特徴においては、「から」は文の階層性では「し」と同じく C 類に分類されることから、接続要素については殆ど同じである。若い世代では「から」の言いさし文が「し」に変わってきているとの仮説のもとに分析を行った。「から」は理由を強調し、確定して述べるという意味的特性を持つ。一方、「し」は複数の理由を暗示している点で違いが見られた。語用論的機能では、談話標識の機能としての両者の異なりは、「から」は聞き手への強い受容要求を示すが、「し」は受容要求もするが、結果までは考慮せず、自分の主張を言い放つことに重きを置いているものと分析した。

次に「ので」についての分析結果として、「し」は、南の分類では C 類で、従属句の独立性の高さから言いさし文になりやすいが「ので」は B 類でもあるため、独立性を考えると「から」「し」に比べ「言いさし文」としての使用は少ない根拠とした。「ので」は前件と後件の結びつきが強い特性を持つ。前件と後件で、一つの因果関係を示してい

ることの違いも「ので」の言いさし文としての少なさを示していると考えた。「ので」の語用論的機能として、「ので」は話し手の主張を間接的に婉曲に聞き手に述べようとする「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度を示すマーカー」であると分析した。

次の第 8 章では、「引用形式の言いさし化」として「って」について分析考察し、最後に「し」との機能の異なりをみた。本研究における引用形式「って」の意味用法は「引用」と「未受容非難①②」の用法があり、言語的文脈がある場合と無い場合があるとした。「従属節って。」は、本来、後件の「〜って（言っている）」の複文であるが、（　）内の部分が言わば、空情報に近いものであるため、省略が容易であると分析した。「従属節って。」は聞き手の未受容の態度から、「〜と私はもう一度言っている」と相手に非難の態度を表明し、相手に強く教える、命令の態度も示せると考察した。

談話標識としての「従属節って。」の機能は、「発話する情報についての話者自身の伝達上の態度」を示し、未受容非難の用法からも「相手の発話のあり方に関する情報を示す」ものでもある。相手が先行文脈を理解していないと、相手への受容要求を示し、反論や非難に使用できる点では「し」と似ているが、「って」の場合は「受容要求」が強いが、「し」は、その独白性からも、相手に対する「受容要求」において、その結果までには関心が無く、「自分の考え」をただ主張する態度であり、相手と議論するまでもないとの突き放した態度を示す場合に使用されている点で「って」との異なりが見られた。

次の第 9 章では、「「し」による「言いさし文」と終助詞の対立」において、終助詞の「よ」と「ね」について分析し、「し」との異なりをみた。先行研究においては「し」の言いさし文は「終助詞（的）用法」としているものが見られた。分析の結果としては、統語的特徴の上で、「し」と終助詞「よ」「ね」の異なりは、接続要素でみられた。「し」は「命令形」、「て形」、「意志形」、「疑問形」などに接続できないが「よ」は全てに接続できる。「ね」も命令形以外に接続でき、これらの要素は聞き手に対して使用されるものであり、「よ」「ね」は聞き手に対して用いられる点で「し」との違いが見られた。出現位置も節末につくという点では似ているが、さらに詳しく見ると「〜しよ。」「〜しね。」の使用例も見られることから、「し」と「よ」「ね」は出現位置が同じではないと判断し、「し」は終助詞とは異なる機能を持つものと分析した。

談話標識としての「よ」の機能をまとめると、先ず「発話する情報に対する話者自身の伝達上の態度」を示し、聞き手への受容要求を持つが、聞き手や周りとの同一認識状況でも使用できるため、議論の余地もあり、説明する態度や聞き手と話す態度を残しているものと分析した。次に「ね」は、聞き手への意向一致要求を持つが、聞き手や周り

との同一認識状況で使用できる。これらのことから「し」と「よ」および「ね」を詳しく見るとその違いは大きいことがわかった。「よ」と「ね」はもともと終助詞であり、「聞き手との関係」において用いられるが、「し」は「聞き手」がいたとしても、その独白性からも、話し手は、発話内容について聞き手への「受容要求」や「一致要求」は考慮せず、変更の可能性がない結論を聞き手に表明する態度である点で「よ」や「ね」とは異なると考察した。また、「〜ねし」と「〜しよね」などの使用がなり立たないのは、「ね」「し」「よ」が複合しても、それぞれの助詞が持つ伝達態度を表す機能が取り入れられ、矛盾する場合も起こり得るためであると考察した。

最終章の第 10 章では「結論と今後の課題」について述べた。

日本語の書き言葉の規範は論理的に完結している文であろう。しかし、日本語の話し言葉、日常会話においては完結しない文が多く見られる。くだけた会話では、「言いさし文」の使用が好まれる。その理由として、本研究の分析から「言いさし文」が持つ幾つかの機能が明らかになった。また「言いさし文」が多用される要因としては日本語が持つ構造的特性が関係しており、談話の中では、効果的な対人的機能を持つ点もその要因であることがわかった。「言いさし文」は元の基本的用法から運用の中で、拡張用法へと変化してきたものと思われる。運用が統語構造に影響を及ぼし、その構造を変化、拡張させる場合もあるものと分析した。しかし、元の統語的構造は、「言いさし文」となっても、潜在的に残存しており、語用論的機能に影響を及ぼしていることもわかった。つまり、相互に影響を及ぼす関係にあると言えるだろう。

今後の課題としては、さらに分析対象を広げ、話し手と聞き手の間に対立関係がなく、「し」が、反論で使用されない場合、どのような伝達態度を示すのか。「し」の使用状況および語用論的機能をさらに拡大し分析する必要があると考えている。